

東京での随想

黄 紅 花 (化学専攻 修士課程1年 中国)

あっという間に日本に来てもう10ヶ月たった。初めての外国生活だから自分自身もうまく行けるかずいぶん心配したが、思ったとおりよりすぐ慣れてうれしかった。東大駒場campusの銀杏道は、私の前の清華大学の銀杏道とすごく似てる。だから、ある日、駒場の銀杏道を渡って13号館の教室に入って：「なんて、この教室のテレビは国産の長虹とかじゃなくて、全部日本製のPanasonicなの？」と、ここが清華大学だと勘違いした。

最初、来たばかりの時は去年、日本のいわゆる一番きれいな桜シーズンであった。中国で知り合った日本人の友達と井の頭公園にお花見に行って、きれいな桜のピンクと真っ白のハーモニーに感動した。その、素敵な景色よりもっと感動したことがある。電車でピークの時の人口密度よりもっと密集している人々を見てびっくりした。なぜなら、私には今だに中国にいる時に雑誌から読んだ日本のイメージが残っているからだ。つまり、日本の国とは、人と人の接触よりも人と機械との接触が多くて、あんまりにも便利すぎて人と人のコミュニケーションがかなり寂しいんじゃないかと思ったから、井の頭公園で人がいっぱい集まって一緒に食事しながら歌ったり、飲んだりするシーンを見てももちろん驚くべきだった。

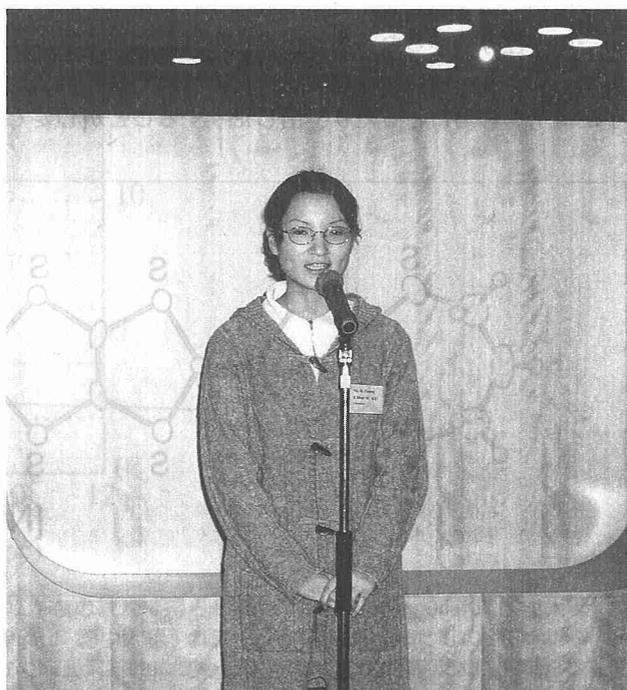
日本語を初めて習う時には、日本語は平仮名、カタカナと漢字をうまく利用して日本特有の文字体系を構成していてとても素晴らしいと思ったが、ここで、私は「氾濫している」カタカナのショックを受けなければならなかった。専門分野とか元々アメリカの単語は、なんとなく納得できるが、日常で多くの場合でも使われ、それも元は非常にいい日本語の固有の文字があるにもかかわらず、現代のアメリカ式カタカナを使うのを見て「いま、カタカナ英語がはやってる？」と思った。「パーフェクト」を見て何回も何回も何の意味かと当てて見たが、結局には聞いて「完璧」を意味するのが分かった。元の「完璧」がもっときれいな日本語なのに、なんて、カタカナ英語を使わなければならない？「こころ」を「ハート」にするとか「母」を「マザー」にするとか前の日本式単語がもっとツーンと心に当たって暖かくなるのに、硬いカタカナ英語を使うのがどうしても私には不思議だった。

「日本語で敬語が一番難しい」多分、外国人だったらみんなそう思うかも知れないけど、私はそうだった。そのときは、日本は礼儀多くて礼儀正しい国だと思った。実際日本に来て、そんな事は少なくとも今の若い世代には限らないことだ、とやっと分かった。駅でタバコの吸

殻をどこにも勝手に捨てる若い人が常に見える。多分、どこの国に行ってもいい側面もたくさん見えるが、悪い面はあんまり少なくてもすぐ目に立つから、悪い影響を与えて強く感じられるから心に残りやすいらしい。日本は、発展国だからかもしれないが、町でよく見える東京のカラスは中国のよりとっても大きくて、栄養をちゃんと取って(?)とっても太ってる。そんなカラス達が町のゴミを散らして町を汚くするのは仕方ないけど、若い人たちはルールを守ってきれいな東京の環境をきちんと守ってほしい。もう一つは、電車の中で何も考えずにシルバーシートに座れる若い人が、年上の人に席を譲ってほしい。

そういうことで、私はここに来てこそ、前に教科書で習った日本と今の日本はちょっと違ってやっぱり実見と経験が重要だことを分かった。マラリア疾病専攻の私のルームメイトもここに来てこそ、「パチンコ」がそんなに「怖い疾病」ではないことを知ったらしい。なぜなら、前に若いお母さんがパチンコに入って子供が酸素不足(?)で死んでしまったニュースが何度も海外でも放送されたからだ。

もちろん、これは第一印象としての感想を書いただけで、いまからも、専門分野での目標を目指して走りながら、大学以外の日本の素晴らしい面をたくさん見て、勉強したい。



理学部留学生パーティーで

東大人の心

ミン・ヨン クン (化学専攻 博士課程2年 韓国)
myks@chem.s.u-tokyo.ac.jp

私は文学には門外漢だ。詩、小説、随筆等の本もあまり多く読んだ方ではない。ただ、大学3年生の頃には、学校の中央図書館で約1年間書架整理のアルバイトをやる機会があって、整理中に見つかった面白そうな本を必ず読もうとしたことがある。そのバイトがきっかけになって今でも忘れる事が出来ない一冊の本と出会った。それはバイトが終わる頃に図書館の司書から頂いた本なのだ。その本はそんなに厚くないし、すぐ飽きるぐらい長いものではない物語が集まっていたので、私がいままで覚えている事が出来たかもしれない。でも、その中のひとつは本当に私の心の深いところまで滲みこんでいた。先述したように文学的才能がないので、私が感じた感動をそのまま伝える事は不可能だが敢えて紹介してみようと思う。

著者は韓国で有名な僧侶文学者の『法頂』で、題目は『無所有』だ。話の筋は次のようなものだ。“いつものように山寺で暮らしていたある日、知人から高雅な美しい蘭をもらった。日々水を掛けたり、日当たりが良いところに移しながら清風を十分あてたりする間、本当に蘭の美しさに魅了された。蘭を鑑賞する事こそ至高の幸福で、もう離れることができない日常の同伴者になった。そのようなある日、山から降りて町にいかなければならない仕事が出来た。しかし、蘭の世話が出来ない事から凄く不安になった。それで、町には行ったものの、仕事を済ませないまま急いで山寺に帰って来ざるを得なかった。そんなに心の安らぎと幸福感をたっぷりもたらしてくれた蘭だったが、それと同時に以前は全然なかった負担感や責任感、さらに不安感さえ生まれて来たのだ。結局その蘭を人にあげることを決心した。その時になってやっと心の完全な平静が戻って来た。”という話だ。人間は何かを所有することによって欲求を満たすことができる反面、必ず代償を支払わなければならない。寧ろ、所有しない方が真実な幸福を味わうことができるし、完全な自由を得ることができるかもしれない。

でも、今も人間は絶えずに何かを自分のものにすることに熱心だ。それは際限ないようだ。そんな所有欲から始まった不幸や騒ぎに接するのは、珍しいことではない。毎日、新聞やテレビを飾っている。例えば、‘IOC委員の〇〇…’、‘〇〇公務員の汚職…’、‘保険金〇〇…’、‘〇〇での万引き…’、等々。そのなかで学殖の豊かな人や社会的な影響力のある人達の所有欲こそ大きな波紋を起し、数えきれない程の物質的或いは精神的な被害を大勢の人々に及ぼしてしまう。

東大人は皆優秀だ。そして日本は勿論のこと、世界に向けて必ず影響力を広げていこう。それをかなえる

ためにいつも一生懸命に研究に励んでいく姿は本当に素晴らしい。ただひとつ、念のため考えておきたいことがある。自身の目的が単に知識の所有や新しい現象の発見だけではないということだ。目標が達成され相応な立場に立ったとき、自ずから現われてくる他者の幸福や自由に関わる自分自身の影響力を忘れてはいけない。そうすると初めて名実共に実力と人間美を兼ね備えた尊敬される東大人になるのではないだろうか。安田講堂の建物にある歴史の痕跡を覧しながら、三四郎池の心を一周歩きながら東大人の心を吟味してみたい。

今まさに、私は日本で‘無所有’の自由と幸福を満喫している。一日を過ごすのに必要なものしかない留生活だから、全然気を配るものは持っていないのだ。但し、今も十分感じながら持っているが、もっともっと欲しいものがある。それは、“温かい心の東大人、東大人の温かい心”なのだ。

国際交流室主宰の Year End Party で

